

二月二 折花に来て見ぬ人ハとハれけり 同

正月 雪をほす日影や木々の朝時雨

雪散しつほむや霰梅の花

あをく立霞や雪の上かさね

二月晦 下水にしつく柳のこす糸哉」(八十七・オ)

舟ならし雪浮河の朝くもり

したりてハ梢ねになる柳哉

嵐より上なる嶺の松のゆき

松も吹雪のめくミのかせす、し

橘のにほひに近き昔哉 友祐

花と見て雪やにほハん冬の梅 同」(八十七・ウ)

右之哥書事任本書之

色々御審心多かるへく候

少も筆者無裁度候

松下

謡山麓舎

永正九年霜月十八日 書之

」(八十八・オ)

佐州にての連哥

うち出かたき雪のふる郷

いろも香もまた冬こもり梅の花 綱

三条西殿

池上春風

浦ちかくよりて帰らんしら波の こやの

あした垣夕かほのはな 」（八十七・ウ）

三月三日御哥

仙人の折しと思ふ一枝の 分て色こき

桃のくれなる

御返哥 宗綱

言の葉の花よ色かよ三千年の

詠めハつきし春毎に見む

」(八十八・オ)

《注》

※ 御母についての記述が途中で切れて後の文と併合してしまっていること
についての書き入れ。

※※ 「咤」の字を記す。「咤」は「詫」に通じる。従って通行文字「佗」で
記した。以下同。

をかハしなさけあらん間ハと也 花依恋而惜落と侍る題の心なり

164 あハれいかに草はの露のこほるらん

秋かせ立ぬ宮きの、原

西行世間を修行しまはりて宮城野を見たりしなり 秋かせの時節思ひ出て
さしも」(八十四・オ) 夕日に置たる宮城野の露も此かせにハ散やするらんと
也 我身の上もあハれいかにとなり

165 月見ハと契て置き古郷の

人もや今夜袖ぬらすらむ

旅に出る時節 思ふ人に形見にハ月より外の物なし こゝにて見るも又有
所にて見るも此一月也互に恋しくあらん時ハ月を見よと契置てしことく月
のさゆる時節思ひ出して古郷に残し置たることはを人も忘すハ此月を此
方のことくおなしく見るらんと也

166 きり／＼〇^ス夜寒に秋のなるまゝに」(八十四・ウ)

よハるかこゑの遠さかり行

夜寒に秋の成まゝにきり／＼すハよハるか こゑのほそきそと也 屋^(不明)□の

せんは也 身のよはりゆくになぞらへて

167 津の国の難波の春ハ夢成や

あしのかれはにかせにたるなり

難波の春ハ迷雲ゆたかにて面白所中／＼おろかなり しかハあれとも光陰
をさへかたくて春過冬にをしうつる 芦も秋の葉になれり 見し春と覺て
かせの吹ハかり也 芦の若葉も思へハ寒風吹渡 春夢となれとなり」(八十

五・オ)

168 としたけて又越へしと思ひきや

命なりけりさ夜の中山

西行世間を修行しまいりし時小夜の中山をとをとてはやとしもたけぬれ
ハ又こへんことかたかるへしと思ひたれとも修行しまいりて又小夜の中山
をとをとてたゝ命にてありけるとなり 世上何事も命^{本ノまま}にて有けると也
又何事も定め事なりと也

169 かせニなひく富士の煙の空に消て」(八十五・ウ)

ゆくゑもしらぬ我思ひかな

物をおもふ時節 天にあふくまゝ富士の煙を見るに行末もしらす風になひ
くなり 此けふりに心をたくえてきゆるとなり 業平の本哥に云 〇須磨^(本)
の海士の焼しほけふりかせをいたミおもハぬ方にたなひきにけり

170 山里にうき世いとハん友もかな

くやしき過し昔かたらん

山居に引籠て昔をおもへハ色／＼」(八十六・オ) うき香りめて花鳥風月のミ
を友とせし事くやしきとなり 我ことく世をいとハん友もかな くやし
りし昔をかたりなくさまんとなり 一 うき世いとハんとは思心ハ詩人か
んハなき人となり 我ハいやしき山賤となり さてこそうき世いとハん友
もかなと也」(八十六・ウ)

二月廿五 梅は世のにこりにしまぬ句哉

政資

といへり 秀句の哥なり

155 玉ほこの道の山かせ寒して

形見なからも来なんとそおもふ

形見かほと云心にてきよからしとよめり 秋もはや末になれハ山かせ寒吹
らしと也 玉鋒の道共さむし共よめり 本哥ニ ○下もみちうつろひゆけ
ハ玉鋒の道の山風寒吹らし

あふ州へ下る人にはなむけニしやうそくを送とて紀貫之よめる

156 もしほ焼海士の磯屋の夕煙

立名もくるしおもひきえなん

此哥序の哥共いへり 口伝海士の心ニ我心(八十二・ウ)をくらふれハうき
かんせい猶深きとなり 磯屋のけふりといひかけて立名もくるし思ひきえ
なんと也 寄浦恋と云題哥なり

157 袖の上に誰ゆへ月のやとるそと

外になしても人のとへかし

月ハ水にこそやとれ共泪のあるゆへに袖にハ月のやとるそと云に 君ゆへ
なる泪そとうたかハれても君の我をとへかしとなり

158 今こんと契し事を忘すハ

此夕くれの月や待らん

今月今夜の出へき時節 かならず(八十二・ウ)来たるへきに約束をしたる
也 只今月ハ出へきけしき也 さためなし事を忘すハ君も此夕くれの月や
待らんと也 忘すハ君と也 月出てとハんとおもふらんと待つ、侍るなり

159 露をたに今ハ形見に藤衣

あたにも袖を吹あらし哉

藤ころも秀能か父秀宗死て彼秀 藤衣をきたる 袖に泪のつもるを父の形
見と見る処ニ彼泪の露をあらしの吹ちらすと也 うたてと也 哀傷也 藤
衣とハ始也又いやしき山賤の衣も申侍なり

160 月すめハ四方の浮雲ち、にきえて

深山かくれを行あらし哉(八十三・ウ)

これハ嵐の心ある様なりと也 月にかゝれる雲を悉吹はらひて今ハ又深山
かくれなとに雲や有らんと尋て吹様なりと也

西行 散位康清男 俗佐藤兵衛則清

161 吉野山桜の枝に雪ちりて

花をそけなるとしにも有哉

花の咲へき時節まで吉野の雪深く降つもりて今年ハ余の常よりも花おそか
るへしと也 雪の比也

162 吉野山やかて出しとおもふ身を

花ちりなはと人や待らん

吉野の陰家に花見になそらへて身を(八十三・ウ)捨を年来久近付人花のち
りしハやかて出へしとや待らんと也 二度と出ましきと也

163 詠とて花にもいたくなれぬれハ

散る別こそかなしかりけれ

無心の花にたにいたくそひぬれハ散別のかなしきにましていはんやことは

うらみつ侘つ待とも更に人ハつらくてとハぬなり　はや我もおもひきりて
中／＼待ましきと思ひさためて夕ぐれにたになり」(七十九・オ)ぬれハ恋し
き方ニ心かひかれて又思ひ返してまつと也

148　里ハあれぬむなしキ床のあたりまで

身ハならハしの秋かせそ吹

あひあふて有し時ハ手枕のすき間の風をたにいとひしか共かゝるむなしき
床の荒はてたるに秋かせさむく身にシミわたりてかなしきにも命の残ハ
たゝ身ハならハしにてありけるよと也　本哥小野小町に　ふしてよめり
○手枕のすき間のかせをいとひしも身ハならハしの物にそありける　所か
らひとりふしてさむき」(七十九・ウ)床のあたりまで吹ぬ　たえてあらん事
ならねとも身ハならハしと也

149　月の行山に心を送入て

闇なり跡の身をいかにせむ

月一へんに心をとゝめて見れハこなたかなたなり　然間漸かたふきて西の
山の陰へ心ハ月にうち隔入なハ闇なる跡の身ハさていかんと也　教者の意
道と仙者に意得と二道あるへし　分別大なり

150　さひしさハその色としもなかりけり

槇立山の秋の夕ぐれ」(八十・オ)

花など紅葉なところ散ハあハれもさひしけれ　更ニ真木ハ常住不変の色な
れはさひしかるへきいはれもなけれ共秋の夕ぐれさひしきにひかれて真木
立山もさひしきなり

藤原秀能　左衛門佐　河内守　秀宗次男
151　夕月夜塩ミちくらし難波江の
芦の若葉を越るしら浪

遠見てうハウの哥也　難波江の月道地なり　芦の若葉の時節なりてしつか
なる時しも夜の月のほの／＼と」(八十・ウ)出る当位ニ奥より幾重か塩の上
をか月のミちくるらんとおもへハいつのまにかこゝなる芦の若葉をしほと
共月のミちくるらん　若葉をしらすこゆるとなり

152　あしひきの山路の苔の露の上に

ね覚夜ふかく月を見る哉

めつら敷なきことなから此哥作者に成かハりて見給ふへし　山路の苔の上
に旅の枕かりて事とふ物もなくてね覚して夜ふかき月を見んさひしきい
かとことはにのへかたしとなり」(八十一・オ)

153　山里の風すさましき夕ぐれに

木のはミたれて物そかなしき

此哥の心も作者になりかハりて見給ふへし　さなきたに山里ハあちきなき
にいハんや木のはミたれかせすさましき夕ぐれなどのありさまいかばかり
のさひしき　思ひはかり給ふへくや

154　草枕夕のそらを人とハゝ

なきても告よはつかりのこゑ

野原に草をまくらにてかりねしたる時はつ雁のなきて過るきゝて　我もな
けきかなしき事侍れハ古郷にてかゝるありさまなきても告」(八十一・ウ)よ

木枯ハ千草万木をからしはつれとも 杉ハ時葉木なれハ木枯のかせにもし
たかハす葉も落す色もかハラすと しかハあれとも雪にハおされて青色も
しろたえにこそならめ あまつさへ彼杉雪に出ると也 木枯のいかに待お
かしくおもふらんと也 おもへハ雪折の声となり 本哥 (朱) 三輪の山いかに
待ミんとしふとも尋ぬる人も (モ・ヤ) (七十六・オ) 嵐とおもへハ

140 遠さかる雲井の雁の名残まで

霞むそつらき難波江の月

難波江ハ月の通路也 しかるあひた月の入まで詠とすれハ月の名残まで打
かすミたるかなしき哥にもおろかなるに雁かねさへ今古郷へ罷立歸ると云
ことくに声のかすかになるまで雁かねさへ鳴行となり 一行之雁雲端滅而
より難波江の月名より (七十六・ウ) 霞そつらきとなり

寂蓮 俊成伯父 俗名中務少輔定長

141 今ハとて田面の雁も打佗ぬ

ヲホロ 朧月夜の明ほの、空

今ハとてとハ一節の事也 春の夜もはや明方時節なり 月も山のはにか、
りて今いか斗と覺てうちかすミたるに心を付て見侍るハ生死二の事おもひ
出てあはれなる 田面の雁さへ今古郷へ罷歸り去言ことくに打わふる (七
十七・オ) 躰なり 田面の夫婦之雁今ハとて離別なり

142 かつらきや高間の桜咲にけり

立田のおくにかゝるしらくも

遠見てうはうの哥也 立田のおくにしらくもかゝりたるを見てきてハ葛城

高間にも桜ハ咲たりけるよと 是ハさくら花をしらくもとよめり

143 物おもふ袖より露やならひけん

秋風吹ハたえぬ物とハ (七十七・ウ)

我人にあきかれしよりはしめて袖に露を置たれハ野原の露も秋かせ吹初而
こそ置初たれ 然間根本野原露ハ物おもふ人の袖よりかならひけんとなり

144 村雨の露もまたひぬ槇の葉に

きり立のほる秋の夕くれ

霧の立のほりたる時節 村雨の露の真木の葉に置たる夕くれのかんせい中
／＼ (七十八・オ) こと葉にのへかたきとなり

145 老の波越ける身こそあはれなれ

今年も今ハ末の松やま

海辺歳暮といへる題なり 幾年次をか来たりつらん老はてたる身にて 此
末の松山を越けるに今年さへはやつまりて歳暮の時節になれる あはれと
なり 本哥に (朱) 契きな形見に袖をしほりつ、末の松山浪こさしとハ

146 おもひあれハ袖にほたるをつゝ、ミても (七十八・ウ)

いは、や物をとふ人もなし

昔ある女房かつらの新王 (マ・マ) を恋て有夜袖に螢をつゝ、ミて新王さつとかけて其
光にて見たてまつりし也 さやうなることくにてもいハ、や物をとおもへ
共とふ人ハなしとなり

147 うらミわひまたし今ハの身なれ共

おもひなれにし夕くれのそら

花散ころの三吉野の里^(x山)

御よしの、春のけひきの面白きくれ はなもはらりとちり かなしきせん
 かたなきにいか程の月日こそあれかゝる時節に雁さへいま古郷へ罷帰る云
 ことくなり なきて別る、めさましき」(七十二・ウ)とや 一方ならぬ別な
 れハ うき時もあれハ 時節なり

133 散^散たえの枕の上に過ぬなり
 露を尋ぬる秋の初風

西ハ秋をつかさとれる方なり 然間日月星辰の光も物にをさまる されハ
 色をも香をもしれる人迷人^(マ)哥人などハはや秋かたになれハなをく光陰を
 おしミ枕の上に泪をおとすなり 初秋ハまた露もまれなる間初風ハ」(七十
 三・オ)枕の上の露を尋ぬる躰にて吹過る也 敷なる、と也 露を尋ぬる秋
 のはつかせハ枕の上を過ぬとなり

134 月の秋ハ名のミそ夜のもしほ草

かく書絶て見る夢もかな

月の秋と云ハ 少のくもりなくひることく也 然間夜ると云名のミはか
 り 時節ハたとへ木石の身なり共やハリね入へきか さあらんにハ夢をも
 見るましき」(七十三・ウ)なり もしほ草とハかくかきたえてといハんため
 によひ出し候はんひの哥なり

135 今ハ又ちらてもまかふ時雨かな

ひとり更行庭の松かせ

万の木のは八日々夜々に庭の面にまかびて散ぬるなり 今ハ庭にまつ一人

残て 風のまつとまかう斗也 夜閑にして松かせをき、て庭面にハ落葉こ
 そまかふへきに 今ハまつかせしくれにまかふとなり」(七十四・オ)

136 はれくもり影を都に先立て

時雨につくる山の端の月

時雨のくもりつはれつする間 都は東山の葉より月の影に時雨のくものひ
 まより都へ先立てすミのほるハ今しくる、と告る斗也 都のそらに色ハ
 れハ山のはの時雨をしれり

137 又もかく浮て世にふるためし有や

た、よふ雲の跡の村雨」(七十四・ウ)

作者之述懐の哥也 我ハかり世にハうかれてとし月をふる物ハあらさるま
 しとおもへハ た、よふくものあとの村雨がありける物となり

138 詠よとおもハてしもや帰るらん

月まつ波の海士のつり舟

月の行夕の波の上に海士のつり舟さし帰るを見てきうかんこらへかたくて
 面白なり 海士ハ此方を詠よとはおもハてしもや帰るらんとなり 一う」

(七十五・オ)きてとて一説有 ^(朱) 月を待夕の波を詠れハあまの釣舟何心なく

さし帰るハさてもをしき物かな 同ハ月の出る時節まで釣舟あらハ 月
 と釣舟を別て詠むならハ猶々きうかんまさるへき物をと也 磯にかりねし
 て月待比浜人の舟さして帰るハ我かく有とハおもひもよろしと也

139 こからしやいかに待見んミわの山

つれなき杉の雪折のこゑ」(七十五・ウ)

125 なれく／＼て見しハ名残の春そとも

なと白河の花の下かけ

しら河物生寺の鞠のかゝりの桜老木と成てたをれたるを明日香井殿そき、
給ひて 草木も人間もおなしことにあはれとおほしめして 一つそや此桜
の下にて鞠をけし也 其時桜の心ありせハ今日ハかり見え」(六十九・ウ)
へきかきりの春そともしらすへき也 我もしれりせハ名残をもおしむへか
りし物をとて愁涙し給てあそハしけるとかや 花になとしらぬとなり 年
歳のはなたをれて侍れハこと木を植置て侍り さてなれく／＼てもと也

126 はらひかねさこそハ露のしけからめ

やとるか月の袖のせハきに

此露泪なり おもひにあまり泪ハ袖にぬれ通てはらふといへるかひハなし
」(七十・オ)さこそハ露のしけからめとハ か様にぬれとをりたる袖のせは
きに満ゝたる月の影のたくさんにやとりたると也 袖の露をはらひかねて
あるに月のやとるとなり 人目しけきと侍ると也 たゝつねならぬおもひ
なれはと也

127 うつり行雲にあらしの声す也

散かまさ木のかつらきのやま

すそより嶺へ吹あくる躰なり くもにあらしのこゑのするハ正木のかつら
の」(七十・ウ)散やらぬ 雲にあらしの色さへ見ゆると也 秀句哥也 聞気
色見る気色有けひき

128 草枕むすひさためぬ方しらす

ならハぬ野辺の夢の通路

野中などの旅ねの躰なり 夢もかゝる所をはいつしるへきにもあらされハ
夢もさたかに見えす也 さていつくにか夢のさたかに見ゆる所やあると心
の内に尋ぬる也 ねられぬ也 本哥古今云」(七十一・オ)所々に枕さためぬ
方もなしにかにねし夜か夢に見えけん

129 秋の色を払はて、や久方の

月のかつらのこからしのかせ

秋の色のうちくしき千草万木をことくく吹からし 払はて、はやいまは
天上の月中のかつらをからさんと木枯のかせハそらに吹となり

130 いたつらに立やあさまの夕煙

里とひかねるをちこちの山」(七十一・ウ)

業平伊勢物語に山などにまよひ里を尋ぬる時節 あさまのたけに煙ハいた
つらに立とも よのつねの人の家の煙ならねハいたつらなりと也 本哥ニ
○しななるあさまのたけに立煙おちこち人のミヤハとかめん 羈中ニ山
路之哥也

具親 従五位 左衛門佐 前左京大夫師光男

131 難波方かすまぬ浪もかすミけり

うつれハくもるおほる月夜に」(七十二・オ)

浪ハもとよりくもらぬ物なれ共朧月も曇なり こと漏もあるへけれ共難波
方月の道なるによりてなり 春の月うつれハ浪も霞侍り

132 時しもあれ田面の雁の別さへ

119 其山と契らぬ月も秋かせも

すゝむる袖に露こほれつゝ

うき世中を致下して山とすむ処に何とやらん人間の習かハ 月を見るにも

「(六十六・ウ) 秋かせをきくにも泪のこほるゝハ月をも秋をも我ら泪をな

かせせよ又昔ニ心を忍はせよとハ契らさりし物を 此山月も秋かせもきて

万おもひ出よと催促かほなるとなり 又うきそとて一節あり 月を見るに

も物うく 秋かせをきくにも物あちきなくて 袖に泪のすゝミこほるゝハ

かゝる時節ハかねて契らん いかならむ山にも入はやおもふハ月と秋か

せの我山にいれと催促かほなると也

120 和哥の浦や興津塩あひにうかひ出る」(六十七・オ)

あハれ我身のよるへしらせよ

和哥の浦にまん／＼としたる塩あひに 少泪のうかひ出たる様ニわか和哥

の出る恵の少ともなり 彼道にたつきハるといへとも不勝なるをも淡にた

とへわか身を述懐の心有 和哥の道おこし玉津嶋に心かけ塩あひにいつる

とも 其かひなけれハ水上の淡にて侍れハよそへしらせよと此身の事淡に

なり

雅経 (ママ) 上五位下 右中将 前刑部卿 頼経男 藤家」(六十七・

ウ)

121 しら雲のたえまになひく青柳の

がつらき山にはるかそ吹

白雲に嶺の青柳のうつろひて春かせになひきたる気色面白と也 柳のいと

ハ かつらのやうなれハ青柳のかつらき 秀句したる也 青柳のなひくに
春風としれり

122 尋来て花にくらせる木間より

待としもなき山のはの月

花にたつね来て家路を忘花一段ニ思入て 我を忘れ他を忘していたる木の

間より」(六十八・オ) 月のおもひよらざるに出たるを見て目をさまし待と

しもなきに山のはより出たるきうかん中／＼こらへかたくてひとりゑミを

したるなり 一花もなき時より心をかけて待ともなき山のはの月に心ある

なり

123 絶てやハおもひあり共いかゝせん

むくらの宿の秋の夕くれ

さなきたに秋ハ物うきにましてむくらの宿の秋の夕くれの有様中／＼いふ

もおろかなり さる所絶て又おもひのミ」(六十八・ウ) にてあり共やハリい

かぬとせん (ママ) いとひかたしとなり 世の中のためし我身にかきらねハと侍

る むくらの宿に住て秋の夕くれ 申にかなしきをなり

124 君か代にあへる斗の道ハあれと

身をハたのます行末のそら

かゝる賢王のゆたかなる御代に生れあふことの身にて有なから 何とやら

ぬ 身の上おもふ様ならざるなり 行末までもはや身は頼れすとなり 述

懐哥なり 上代に生れあへる道ハあれと官位ほうろくもとし」(六十九・オ)

ければたのまれぬ行末のそらと也 道ハあれと政道ハたゝしきなり

公なかせんとおもひ返して待んとおもへハ　いかにせんとなり　本哥に云
○頼めつるこぬ夜あまたに成ぬれハまたしとおもふそ待にまされる^(x)　さて
も待とも君ハつれなくてこぬ夜の数ハおほし　はや^(六十三・オ)　おもひあ
まりて待しと思ひなからさすかに　きらす只明す夜の数猶多しとなり

113　詠つ、おもふもさひし久方の

月の都の明方のそら

このうた作者に成かハりて見給ふへし　けにとこゝに居ながら廣寒とて
月の中に都のあると云物とて夜と共に久方の月をなかめんハ心の中さひし
かるへし　なかむる心夜もすから^(六十三・ウ)　八月の中に入てある月のそ
らに歸りてとなり　感情甚不淺也

114　下紅葉かつ散山の夕しくれ

ぬれてやしかのひとりなくらん

さし見えたるけひきの哥　時雨ふり紅葉かつ散山をなかむれハ　何とも覺
ぬ木陰にしかのなくをきゝて思ひ遣事なり　我もひとり人待うちふしに鹿
打なきて紅葉も散時雨ふりて色に^(六十四・オ)

115　おもひ入身ハ深草の秋の露

頼し末や木からしのかせ

君を我頼ておもひ入ハ只深草の秋の露のことくに泪にしほとぬれて行たれ
ハ　君ハ我に心あさくかハりはてゝはけしき躰なり　たゝ君か躰を見れハ
只深草の秋の露をこからしのかせのさんくゝに吹散したることく也　本哥
ニ云○筑波山^(六十四・ウ)は山しけ山しけゝれとおもひ入にはさわらさり

けり　深草ハおもひ出のふかきなり　露ハなミタ　かやうに歎かしミても
末ハ木からしのかせとあきの色さへ見えはてゝとなり

116　昨日たにとハんとおもひし津のくにの

生田の杜に秋ハ来にけり

生田の杜ハ秋の面白所なりときゝて秋より前にたにとハんと思ひし聞いそ
^(六十五・オ)　き此秋に来て見れハ中くゝきう感こらへかたく面白所也　一
本の哥云　○君住は問まし物を津の国の生田杜の秋の初風　津国本国の仁
にて候　京へ上ける時僧都法印此哥をよみてつかハしけるなり

117　おもひ出よ誰兼言の末ならん

きのふのくもの跡の山かせ

とハんといひし人^{たか}の方へたるに向ひて^ヒ　^(六十五・ウ)　きのふの雲ハ跡なけれ
とも山風の残て待れハ思ひ出よとなり　君と対面してさらへて云たる也
昨日の雲の跡の山かせのことく君の兼言は^(x)一もあとをとめ給ハぬ也　さて
たか兼言とおほし召たるかと也

118　あけは又こゆへき山のミネなれや

そら行月の末のさと人

えんけんてうはうの哥也　雲一てんもなき晴天の夜いつくともおほえぬ廣
野などに　たひねをして月のゆくえを見れハ^(六十六・オ)　少しらくもの見
ゆる也　雲ハたかきミネより生れ出る物なれハ　見ゆるしらくもの下ハ嶺
なるらん　月も今夜こゆれ我も明ハこゆへきなり　なかむるなり　秀句の
哥也　羈中長月のミ見てあるへきかと嶺のしらくもと侍るなり

もひて これ程に忘却して有ける物かな 是も夕くれを待ならひしゆへなり 何くとして夕暮を待ならひつらん 後悔して自問自答せり これもしのふゆへ也 つらき嵐の声もうしといふ物」(五十九・ウ) ハ身をいたく本のまゝなるそこを云添るとてなと夕くれを待習けんとなり

107 たまゆらの露も泪もと、まらて

無人こふるやとの秋かせ

定家御母し、給ひて後 定家五条の俊成之所へいらせ給ひて見給へハ 折ふし野分して物あはれなり 俊成ひとりわたらせ給ふ有様を見給ひて 定家此哥をよみて五条へ送給ひけるなり 野分の時節物おもひのしはしめの露も」(六十・オ) 泪も哀傷 老敷ニ去年おくれて たまゆらハしはしの露草葉にと、めぬ物ハ秋かせとなん 泪もろしとなり

108 きえハひぬうつろふ人の秋の色に

身をこからしのもりの下露

本契たる人の我にあきてよそにうつろふを見て身をこからしかなしむなり かくてつれなく此身きえやらぬハ梢をハ木枯の風に吹かれ」(六十・ウ)て こからしの森の下露の木のねにのこるかことくなるとなり うつろふ人の秋の色に身をこかしハ もたへこかれて松の下露のきえぬを わひぬるは きえはやとなり

109 いつくにか今夜ハやとをかり衣

日も夕くれの嶺のあらしに

秀句の哥 我か家にてたに物さひしく物あはれなる時ハあるに ましてい

ハぬや行暮ていつくともしらぬ山中なとに」(六十一・オ)と、まら人など恋しくあらん感情深るへし 本哥 (朱) からころも日も夕く時ハ返々も人そ恋しき

110 袖にふけさそな旅ねの夢も見し

おもふ方よりかよふうらかせ (仮に形式をととう)

浦風はけしきそま枕をかりぬれハ更ニねられす 我方をも夢にも中くともねられハおもふ方より吹風ならハ袖にふけとなり (六十一・ウ) 成給ふへくや 本哥ニ源氏 (朱) 恋佗て鳴音にまか、おもふ方より風や吹らん 古郷の事をのミ思ひ出として夢もむ物風なりとも

家隆卿 従四位 前上總介 前中納言光隆之四男

111 桜花夢かうつ、かしらくもの

絶てつれなき嶺の松かせ」(六十二・オ)

はや花共に白雲ハ跡をいたすと也 今ハいとひし春風ハかり嶺にはな白雲の以前をおもへハ夢ともうつ、とも覚す也 秀句の哥 (朱) に云。風吹ハ嶺にわかる、白雲の絶てつれなき君か心か 桜のことく成む一め跡もなし さて夢かうつ、かとなり

112 いかにせんこぬ夜あまたの時鳥

またしとすれハ村雨のそら」(六十二・ウ)

さしゆるさすよなく時雨を待ともくつれなき也 中くま、ひきらハやと思へハ 村雨のそらになれると也 うたかひなし

ゝなる野までしくるゝとおもへハそれにてハなかりけるよともろき泪にて
ありける物をと也 庭の」(五十六・オ) 松かせをきゝて物うくさひしきに腸
をたち我なから物をおもふよと袖にしくるゝハ泪なり

100 春の雨のあまねき御代を頼むかな

しもに枯行草はもらすな

春の雨ハ一天下の草木根なをはくゝむ也 其ことくに大公の御代のめくミ
を諸人頼申なり 我年たけて霜に枯ゆく草葉の風情のとくなれ共」(五十六・
ウ) 物の望ハある也 大公是をもらし給ふなと頼む心也 枯行草木ニ雨露
をそゝきける恵也 公思あまねき氏をあハれミ給へとたのミて

藤原定家朝臣

101 春の夜の夢の浮橋と絶して

ミねにわかるゝよこくものそら

大方の句を面と見る躰也 あなち夢のうき橋といふ物ハなし 明方のよ
こ雲も嶺にきれくゝに成て夢もと絶ゆる」(五十七・オ) 時分なる斗也 夢の
うき橋ハ只春の夜の夢なり と絶してとハ 更ニたえたるにハ 明ほのはう
くゝとしたる方なり

102 こまとめて袖うちはらふ陰もなし

さのゝわたりの雪の夕くれ

さのゝ渡とハ小野のあたりと云心也 小野のあたり雪の比駒をもとめて雪
をもはらふへきに家もなしといへる心にて 陰もなしよめり 本哥云 (米)
くるしくもふりくる雨か三輪崎さのゝ渡に家もあらなく」(五十七・ウ)

103 年もへぬいのる契ハはつせ山

をのへの鐘のよその夕くれ

泊瀬に恋をいのり申せともかなハす 曲もなくいのるしるしに昨日けふと
ハおもへとも年月ふる也 然間とかくせし間に我人ハよその人にこそ契ら
ん 中く祈心をも思ひ捨なり 初瀬ニ等閑ニなれハ尾上の鐘もよその夕
暮とおもふ也 泪瀬の神ハ恋ゆへの神なれハ祈契ハいつと」(五十八・オ) 云
つゝくるハ祈はてなん尾上の鐘のよその夕くれにてもやあるらんと也

104 松かねを磯辺の波のうつたへに

あらハれぬへき袖の上かな

磯辺の松か根に浪のしけく折かへる終には木の根もあらハれぬへしと也
我泪もさのミハしのひかたくてあらハれぬへき袖の上にてあるとなり う
つたえは一向あらハれぬへきけしき也」(五十八・ウ)

105 帰るさの物とや人の詠らん

待夜なからの有明の月

此月ハ暁方に出る月なり 我ハ夕暮より暁の深のほるまで待物を 人ハ我
に心をかハりて今夜も誰をとふて此在明の月を帰るさのうき物となかむ
らん うらめしとなり

106 あちきなくつらき嵐の声もうし

なと夕くれをまちならひけん」(五十九・オ)

幾夕くれかまちならひつらん 月日をふる程に忘却しておほえすしらすく
ちにまかせて あちきなくつらき嵐の行もうしといひて 我なから口惜お

雨の時節にをしうつる也 さてもつれなく今までとハれんと也 伊勢物か
 たりに云 業平の御方へ二条の妃あそハしける御哥斗いハ、(四十五・ウ)
 ○秋かけていひしなからもあらなくに木のは散しくえにこそありけれ かな
 ならずとちきる也 さてこそ秋かけていひし事を待とせし間にふりけると
 なり しくれハ袖のなミたなり

78 霜枯ハそれとも見えす草のはら

誰にとハまし秋のなこりを

人ことにくれて行秋の名残ハをしめ共 のこらす暮○つると也 さて秋の
 名(四十六・オ)残をハ誰にとふへしと也 万撰ちかく本ニ云○世の中を何
 とたとへん朝ほらけこき行舟の跡のしらなミ 秋の名残をハ草の原にこそ
 とふへきと思ひしに霜しろく枯わたりねハ誰にとハましと也 草の原ニ
 とふ哥おほろ月夜の内ニ侍る うき身(ママ)にやかてきえなん尋ても草の原をハ

誰かとハまし(四十六・ウ)とておもふ

79 下萌に思ひきえなん煙たに

あとなきくものはてそかなしき

思ふ恋の哥なれハいまたおもふ人にハしられす也 只心の中にてわきかへ
 りくおもひつもりてはや一せつななり 人ハしするか終 雲ハきゆるか
 終 二のたとへ一すちの口ハ成てもくものことくにてそらにしはしきえせ
 す(四十七・オ)あらハ若おもふ人にまみえても恋ゆへし、たる煙の雲そと
 いひしらせへき人のあるへきなれとも雲も猶跡なき物なれハかなしきと也
 かく恋かなしミて消なん煙の雲たに人しれすありて跡もなからんはてそか

なしきとなり

80 夢か(×も)とよ見し面影の契しも

忘れすなからうつ、ならねハ(四十七・ウ)

只一度などあひにしハ夢のことくなり うつ、ともいはんとすれハむかい
 居たる事もなし しかハあれとも忘すとも也

宮内卿 前右京権大夫師ハ光女(ママ)

81 かきくらし猶古郷の雪の中に

あとこそ見えね春ハ来にけり

本より佗て年来住里なれハ事向方(ママ)もなし ましてかきくらしふる雪の中
 にハ猶々人跡絶たるに(四十八・オ)春ハめんひなけれといたりたる也

82 花さそふひらの山かせ吹ニけり

漕行舟のあと見ゆるまで

平野山ハ花のたくさんなる所也 近江之湖にさしか、りたる山ハ然間風に
 さそハれて水海に花たくさんニ散うかひて漕行舟の跡の見ゆるまで也 本
 哥の面影(米) ○立田川紅葉なかれて見ゆるめり渡らハ(四十八・ウ)にしき中
 や絶なん

83 心ある小嶋の海士のたもと哉

月やとれとハぬれぬ物から

所から小嶋の海士のたもとねれたるを見て心ある様に見えたり しかハあ
 れとも本より塩汲たれハ世わたりにぬれたると也 月やとれとハぬらさぬ
 と也 小嶋のあまハ心なきながら我が能袖のぬれたるけしきを(四十九・オ)

梅の花も春の夜の月も皆業平の形見也 色香も月も昔のま、なれ共我が身ハかハるとなり

72 面影のかすめる月そやとりける

春や昔の袖のなミたに

此哥も業平の面影也 誰か上にも有へしか たとへハ前の年の春の花」(四十二・オ)をもろともに詠たらんに其人ハうせて我ハかり残て今年の春の夜の月花をミんハ其面影一入泪にかすミて袖に月影やとるへしと也 昔のはるを思ひ出てなかる、泪なれハ月もかすめると也

73 あたに散る露の枕に伏佗て

鶉なくなり床山かせ

我おもひのミにて枕の上にハもろき泪はらりとこほれて伏佗也 かゝる時節」(四十二・ウ)鶉のなくをきゝてあハれに思ひやれハ山風あらく吹野への露も散りさハかしき時節うつらも床にふしわふるらんとなり こゝにて名所ハよひ出しかたく侍れともうつらの床といハんために秀句せり きちうの枕なれハふしわひぬる也 床の山かせうつらなくハうきと也

74 古の秋のそらまで角田川

月にこととふ袖の上かな」(四十三・オ)

月のあきらかなるをミて 千年 万年以前にも月ハかハラぬ物なれハ古の秋のそらまで角田河と秀句せり 月にことゝふ袖の露とハ 誰上にとあるへし もろともに月を見たりし人ハなからん後者月に向ひてひとりことなと泪なからあるへし 底心ハ業平の角田川にて足のあかき鳥を御覧して都

鳥事とハんなど」(四十三・ウ) いひ給いしこと侍り 其時の御哥ニ云〇名に(ママ)しほハいさこととハん都鳥我おもふ人ハありやなしやと 秋のミの月に対して心をすまし月にこととふへきにハあらね共何となく昔おもひ出されはこととふ也 そらのすめること葉をよせて角田川とも 本哥ハ前二住と同一ことなり

75 (歌欠

前注文に続くが、便宜上分けて番号を付した「おしむとも涙に月は心からなれぬ袖の秋をうらみて」を欠く

月は心なからなれぬる袖に」(四十四・オ) 恨之秀句 をしむ共なき泪になれたる袖二月のやとり給ひてくもり給ふハ 月殿の心から秋をうらミてとハ秋の物うきまゝに泪のこほれて月をくもらかせハ秋をうらむるなり 西行法師哥にも (朱)〇くまもなき折しも人を思ひ出て秋の月をしむ共と也 秀陰のとし移をうらむるなり 月になるゝとも」(四十四・ウ) 心からとなり

76 色かハる露をハ袖に置まよひ

うら枯てゆく野への秋哉

暮秋の哥也 野辺を見れハうら枯わたりてたまゝのこれる露までも風吹こほしはや秋ハいか程あるへきや いまた我か袖にハ色替露の置まよひたる有様うらめしとなり 置まよふとハをくまで也 野への秋の色は」(四十五・オ)うら枯てゆけ共袖の上の露ハ枯すと也

77 ふりにけり時雨ハ袖に秋かけて

いひしハかりを待とせし間に

秋かけてとハ夏の末つ方よりいひかハし約束ありしを待とせしまにはや時

に月のひかりのやとるらんとなり しほる、袖に雲の上の月の光をもらすらんと也 月を隔となり

55 あらし吹嶺のもみちの日にそへて

もろくなりゆく我なミタ哉

嶺の紅葉のことく我泪も日にそへて」(三十八・ウ) もろくなりゆくと也 述懐の哥也 誠に感情難然候歟

66 山人のおる袖にほふ菊の露

打はらふ間に千代ハへつへし

碁をうつうちにおのゝ糸の朽るなといへる面影なり 菊と仙人とを絵に書たるを見て袖を払中にも千代ハ経つへしと也 菊の威徳をいへり」(三十九・オ)

67 難波人あし火たく屋に宿かりて

すゝろに袖のしほたる、哉

あはれなる民にて蘆火をたく屋に宿をかりて見るに 世を渡る有様にて大事なり 又我かかゝる所に旅のならひとて宿をかりたるを思ひはかれハあはれなり すゝろに袖のしほたる、とハあなかにさやうにハなければとも袖にしほたる、と也 蘆火たく屋に旅の」(三十九・ウ) 宿をしめて誰(×か)こそしうせいをもよをすへきとハなければとも言つる心也 しほたる、とハえんの心也 すゝろは篠蘆屋えんにて候

68 稀にくる夜半もかなしき松風を

たえすや苔の下にきくらん

釈阿定家の母の墓所近きたうに一夜籠てよめる 嵯峨の辺也 忍恋の哥也 後哀傷の哥なり」(四十・オ)

69 ちらすなよ篠柴草のかりにても

露かゝるへき袖の上かハ

忍恋と云題 不及人を恋わたるなれハ袖の上に露かゝりてとハなり 篠の柴のことくニかりそめて我か袖には露をかけへからす 忘てもそてに露をかけハ心中あらハれへしと也

70 立帰り又も来てミン松嶋や

をしまのとま屋浪にあらすな」(四十・ウ)

小嶋のとま屋浪に浪にあらすなとハ 小嶋の景気のおもしろさを捨かたく思ひてしうしんにいたてよめるなり

俊成女 院之女房 母中納言通具室母 前尾張守盛頼女

71 梅の花あかぬ色香も昔にて

おなしかた見の春の夜の月

伊勢物語に 業平の読しおも影 二条妃末世に付給ハて 五条の妃ハ」(四十一・オ)をはにてましますにそへたてまつらせ給て御わすを業平正月十日比に月も梅の花も面白時節にしのひ入てあい給てさて次の年の正月十日比に猶しのひ人給ひたれとおもふ人をハおかさすして 五条の唐板敷に夜と共 月と梅とをなかも居てさても去年の月と梅とにてハなしとて本哥ニ云」(四十一・ウ)

月やあらぬ春や昔の春ならぬ 我か身ひとつハ本の身にして

影なり　　にも草の宮殿　樓閣も」(三十四・ウ)恋しくおもはんなり　しか
るに夜の雨さへしのにふりて　いと泪をさそふと也　なを山郭公のこゑハ
むかしにかはらすなくなり　かれがなく泪を我か袖にそゆる躰なり　蘭上
花の時金帳下をおもへる也　ほと、きすハ過ぬ也　廬山雨夜草庵中と云詩
題也

59　忘しよわするなとたに云てまし

雲井の月の心ありせハ」(三十五・オ)

雲井の月とハ閣中にて見る月也　王位の位をゆつり給いて陰居し給ふへき
をハ上君ちかく御なり給ふといへり　然間釈阿もとしたけぬれははや天上
のましりあるましきと　おもひ切て　大内中にて見る月の　心あらは忘しよ
忘るなとこそ契けれ共　月の心なけれハ数年見なれつれとも名残をしき斗
也」(三十五・ウ)青雲の古を忘しと也　雲の上の月の心に心のあらハ忘るな
とたにいひてましと也　明の月にて有となり　霜まで秋の夜の月なくなる
となり　袖の露こほりて霜まで秋なれとも人とハす侍なり

60　木のは散る宿にかも敷袖の色を

あり共しらて行嵐哉

おもひつもりぬる我か袖に木の葉の」(三十六・オ)時雨やまかふと見れハそ
れにてハなかりけるに　た、泪の色　からくれなると成てこほれけるよと
也　紅葉とくれなゐの涙と袖に分かたけれハまかふとなり

61　せき返し猶もる袖の泪哉

しのふもよその心ならぬに　通具

泪をおとさしとせきかへせハ此身のくるしきほとにしハし此身をやすめん
ためなり　又泪をおとさハうき名に」(三十六・ウ)　立ぬへき間涙を落さし
くとしのふも身をおもふためなり　しかれハ当座のくるしき間身をやす
めんために泪を落　又うき名に立てあさましからん身をかねておもひしり
て泪をおとさしと忍るもたふり　涙をおとすも又泪を忍も此一身をおもふ
ため也　いつれわかつらからんと也　なミたをさしと、めくする世の中
の人も」(三十七・オ)かくあハれにいへハよしやくとも也　さてこそほかの
心ならぬとなり

62　今こんと契しことハ夢ながら

見し夜に似たる有明の月　通具

君ハ別し時ハやかてくまいるへしとこそいハれつるかそのま、夢

63　しめ置て今ハとおもふ秋山の

蓬かもとの松むしそなく

釈阿もはや八十にあまりて天上の位」(三十七・ウ)とをくすめりてけふ明日
をも期しかたくて秋の野山を見ても我ふし所とおほしめして　兼よりしめ
置見給へハ　あらくとしたる蓬か本にハ松虫のさひしく鳴たるハかりな
り　隙うちあけて草の庵ニとち籠て今ハとをれハ松虫のなくとなり

64　いかにして袖にひかりのやとるらん

くも井の月ハへたてこしミを

作者八十あまりまで天上の位をす」(三十八・オ)めり給て後に雲の上にて数
年見なれし月ハはる、と程へた、りぬるに　いかにしてか、るなれたる袖

きハ春や」(三十一・オ) 昔の月にとひ奉へきと也 本かに^野 (朱) 月やあらぬ春
 や昔のはるならぬ我か身ひとつハもとの身にして 業平二条の宮にて前の
 年の春のさかりの月のよなりしにあひ奉し人ハ次の年の春の梅の花さかり
 の月の夜にハ見え給ハす也 ひとり二条院の庫にふしてよめる哥なり 春
 の月にとハ、やと也

52 あはれ又いかにしのハん袖の露」(三十一・ウ)

野原の風に秋ハ来にけり

泪の露も大方の時こそしのはるれ さなきたに秋ハ物うきに ましていハ
 んやおもひにあまり泪ハしのひかたくて袖の上に はらり／＼とこぼる、
 ハ野原の風ハよそにハなかりける物よとなり 待にしほれたる袖なれハ秋
 風にたんちやうせんにハしのひかたき袖の露也

53 野へに置露の名残もしのはれす」(三十一・オ)

あたなる秋の忘かたミに

秋の色／＼の千草も嵐にのミ枯はつれハ せめて秋のかたミも露をのこし
 て見むとおもへハ露もことにあたなる物なれハ秋の名残にしのはれすと也
 秋の名残にハあたにをく露を忘形見にと也

54 影やとす月の夜すかのあき来れハ

月そ住けるおの、しの原

秋の程ハ露をよすかにて月ハやと」(三十二・ウ) りたれとも はや秋もくる
 、後ハ露もなけれハおの、しの原にハ常住^(ママ)ふ返の月ハかりやとるとなり
 月ハ露を便なれとも秋暮ぬれハおの、篠原に住けるなり

55 霜むすふ袖のかたしき打とけて

ねぬ夜の月の影そさやけき

君をまち思ひ入たる夜のかんするにつめられて泪もしも、一にこほりたる
 其袖をかたしきてぬれハあた、か」(三十三・オ) なるにをされてこほりし霜
 もとけて露のことくなるに さら／＼ねぬ夜の月影めくるにやとると也

霜むすぶとハ待人の事斗なり

56 冬の夜のね覚ならひし槇の屋の

しくる、上のあられふる也

冬の夜ハなかきま、 さならすともね覚あるへきに時雨あられにおとろか
 されて」(三十三・ウ) 幾夜かねを習つらんひとり得院^(ママ)かほに時雨の上に
 霞のふると也 さひしきかんせいなり

57 霜こぼる袖にも影ハやとりけり

露よりなれしあり明の月

霜も泪もこほりぬる時節 初秋の露よりもなれ来つる在明とへたてこしも
 のかな 中／＼思ひもきりなんとすれハ 思ひ忘る、など催促かほに」(三
 十四・オ) 見し夜ににたる有明の月哉と也 契し事ハ夢になれとも 有明
 の月は見し夜に似たるとなり

釈阿弥陀仏 皇太后宮大夫俊成卿

58 昔おもふ草の庵の夜の雨に

泪なそへそ山ほと、きす

都人などのおちふれて かたいなかなとに草の庵ひきむすひて居たるおも

はおとさひしき秋の夕暮

秋の夕くれハいつくもさひしきなり　さりながら荒田の草ハいと、はう
くとしたる夕かせ吹て鳴のはおとさへきくにとり分てさひしきせんかた
なしとなり」(二十七・ウ)

46　月さゆる磯におりゐる浜千鳥

あとふミつけつ秋の形見に

秋のすゑつ方の哥也　月さゆるなかに磯辺の景氣の面白はや満そくなるに
浜千鳥のこゑくになきつれていそにおりゐるふるまひ殊に興感難邁　せ

めて浜瀬磯辺に跡ふミ分よと　今夜の秋のかた見に見んとなり」(二十八・オ)

47　明ほのや河瀬の波のたかせふね

くたせる人の袖の秋きり

明ほの、時節霧のあしのはやくくたるを見て　高瀬舟をさし下す人の袖に
であると斗也　霧のゆくにととゆれハ也　高瀬舟ハ異名なり　只高瀬とも
侍る　秋霧の中に見ゆれハふねくたす袖かと也」(二十八・ウ)

48　猶てらせ世、にかハラぬおとこ山

あふく嶺より出る月かけ

今ハ源氏神なれハ氏子を代くにかハラすまほり給へと　此上にも猶威光
増給ひて子孫末とまでもまほり給へと也　男山八幡之通光ハ源家にて御わ
せハ猶照給へとなり

49　たつねても袖にかくへき方そなき」(二十九・オ)

ふかきよもきの露のかことを

よもきふの宿の面かけ　末つむはなの住給ふ所ハ　御母のひたちの宮の御

跡なり　源氏須磨よりのほり給ひて彼所をとひ給へハ　よもきしけりて露
ふかし　源氏の御心中に我よりほかに誰か露のなさけをまかけまいらせへ
きとおほ」(二十九・ウ) しめして一首あそハしける　(朱) たつねても我こそと
ハめ道もなきふかき蓬のものと心を　露のかことハ少のなさけの事也　方
そなきハ便なき也　蓬か宿薄か宿ハひけなり

50　あさちふや袖に朽にし秋のしも

忘ぬ夢をとふあらし哉

浅茅生の萌出し若葉うつくしかりしも光陰うつるまゝに　おとろへはたし
霜に」(三十・オ)　うつるハ一すいの夢也　我かすかたの花やかなりしも浅
茅生のことくおとろへて涙も雪をこほり　袖も霜にれんくちはずるを
我ハ忘すなから一睡の夢ぞと思ひてゐたる所を嵐の思ひ出よときいそくか
ほに猶あハれなるとなり　霜を勧めたとゆれハなり　哀傷にて侍り　浅茅
生の霜にくちたる様にしほる、袖を忘るならハととふ嵐かな　其愁情甚物
うかりしと侍り　嵐を別に見るへからす」(三十・ウ)

権大納言左衛門尉通具

51　梅の花誰か袖ふれしにほひそと

春やむかしの月にとハ、や

梅花のにほる無比類面白有ハ昔いかなる人の袖をなれて其匂をうつしとめ
てにほふらむ　誰かハしる人あらん　昔にハかハラぬ人ハ月よりほかハな
し　面白事　やさしき事　よろつをハ月故そしり給ふらん　こたへ給ふへ

山里に花見紅葉見などのために行たりける次ニ来などに山居の庵に立寄て
心やすき御すまひかな我、もあらまほしくこそ候へとて心にしま」(二十三
・ウ)ぬあらやくそくをして いろ／＼まいりて同庵可申とて立帰りし候而
其後者世の中の活斗によりて此事うち忘侍る時節 よの中ニうき事侍る次
に思ひ出して さる事有何そや山里に契し庵や荒ぬらんまたれんとたにお
もハすして過しけるよと也 別ハ山中の庵をかりそめに」(二十四・オ)立出
て他郷に年月を送き 其庵ハ荒ぬらんまたれんとハおもはすして出し物を

39 霜さゆる山田のくろのむら薄

かる人なしにのこるころ哉

此哥現成躰也 冬の感情ひゑやせたるすかたなり 人里遠き山田のくろの
村薄ハ誰かハかるへきと也」(二十四・ウ)山里を皆かれハ村薄斗残けり 迷

玄躰 少も述懐の心も侍る哉

40 我かたのふ七の社のゆふたすき

かけても六の道にかへすな

山王廿一社をたのミ奉て六道輪廻をさせ給ふなど祈しと也

権中納言通光 久我内大臣通親之子
道具ハ次男ニます也 氏ハ源家也」(二十五・オ)

41 三嶋江や霜もまたひぬあしの葉に

つのくむほとん春かせそふく

いまた初春なれハ冬のことくにて蘆の霜もこほりつめたる時節少あら／＼
かにはるかせ吹わたり そのことくにやはや蘆の葉もつのくむほとん春風

なるとなり 江やハ歎するや也 只三嶋江いはんかためなり 霜もまたひ
ぬハ冬の事なり 春かせそ吹といへるハ」(二十五・ウ)光陰のはやく移をか
なしミ給ふて

42 うすこほりきよき鏡と見し物を

桜にくもる花のした水

水ハいつ見るも面白物也 分方なし さりなから 所から山下水や池の水
などの薄氷の時節きよき鏡のことくいつれの心なくやせひゑたる感情面白
かりしなり いまは又木の下水えんとして花くもりた打くもりたる風」(三
十六・オ)これ又真実 きうかんだえかたしと也

43 武蔵野ハ行とも秋のはてなむ

いかなるかぜの末に吹らん

武蔵野の秋のけひきのおもしろさに分れとも面白さの終そなき さりなか
らいまた見ぬ末野にやいかなる風流に面白風や吹らんと 床しくおもひた
るへし 千草の色の終なきに武」(二十六・ウ)蔵野の終なきをとりあハせい
かなる風の末に吹らん

44 立田山夜半に嵐の松吹ハ

雲こそうときミねの月かけ

夜半のあらしハ立田のミねの松をふけハくもハ皆はる、なり をのつから
かたふく月影ハ嶺に残たるハかりなり 一本の哥の面影住吉の」(二十七・オ)
松の木の間を詠れハ月落かゝる淡路嶋山

45 かせ寒きあら田の面に立嶋の

物おもはて見し月はさゆるまできうかん面白なり いまハおもひのミにて
見る月なれハ泪にくもりて秋ハ待得たれとも昔のあきにハ似すと也 何の
心もなくて見し秋の月を」(十九・ウ)恋しくおもふ事也 老後の哥也 いに
しへかんしよくもくもらて見つらんと也

32 木の葉散宿にかたしく袖の色を

あり共しらて行嵐哉

残紅葉をふうりうにかたしき ねたるをあらしハしらてや吹過ぬらんとを
せと也 嵐ハ心のわろき物也 こすゑくのもみちをこそ吹ちらさめ」(二
十・オ)かたしきたる紅葉をもしらてはさそハるへきと也 木の葉をつくせ
るあらしハ何とて袖の紅涙をはあり共しらて行らんとなり

33 野辺の露ハ色もなくてやこほるらん

袖より過る萩のうはかせ

我か袖より過る萩のうはかせ 野へに置しら露ハ そのまゝ色もかハらす
」(二十・ウ)そこほるらん うら山しきと也 我か袖にはらりと散る泪の露
ハ秋紅とかハりはつるうらめしき事なり 大切なり 野辺の露ハ色もなき
と云ハ袖の上の露ハ紅泪なり

34 岡野への里のあるしをたつぬれハ

人ハこたへす山おろしのかせ」(二十一・オ)

岡野への秀哥(ママ)に立よりて見れば閑居などのある様なり 主ハ見えす也 蕨
折なと爪木取なとや出ぬらん 山下風さひしくておとつるゝこと也 さひ
しき躰なり 心地修行あり 本哥に 柴の庵のあるしをとへハ戸をとちて

後の深山のをのゝこゑ

35 おもふ事なととふ人のなかるらん」(二十一・ウ)

あふけハそらに月そきやけき

物おもふ時ハ地にふし天に仰く時節月にまなこをはつたと見あハせて前の
毎念をすつへきと忘たる也 儘除一全言俱絶哥也 道場所得法無能発
問者修行也

36 をしなへて日吉の影ハ曇らんに

涙あやしき昨日けふかな」(二十二・オ)

日吉山王の御本躰のくもらぬ事ハまきれなれともなとやらんミたりかハ
しき時ハくもらぬ方も泪に曇也 作者の住給ふ処をむとう寺といへり 病
の時節 むとう寺にて読給ふ哥にいはいく たのミこし我古寺の苔の戸にい
つしかくちぬ名こそおしけれ」(二十二・ウ)日吉の威光いかめし 民のあを
くもおしなへてくもらぬとゆひあらハせると也

僧正少公前を背給ふ折ふし

37 世の中のはら行(ママ)そらにふる霜の

我か身ひとつそ置所なき

霜ハ世中はれくとしたる時ふる也 霜ハ有所にもをけとも我か身一」(二
十三・オ)ハ置所なきと也 病の時節とかや 前の哥の心ハ我か身ハかり置
所無と也

38 山里に契し庵やあれぬらん

またれんとたにおもハさりしに

い」(十五・オ)をおさへかたし かゝる氣色を君かしらてや問ハさらんと也
つねなる人ハ何(ママ)もきくとやおもふらんと也

25 我涙もとめて袖にやとれ月

さりて人のかけハ見えねと

この月ハ君ともろともに見たりしなり いまハきミにも別ぬれハ月よりほ
かになつかしき人ハなし」(十五・ウ)しかるへくハ我か袖の涙をもとめて月
やとり給へ さありとても無人の影ハ見えねともと也 袖の上の月色にて
そのようかんにせんとにハあらねともとなり

26 忘しと契て出し面影ハ

見ゆらんものを古郷の月

旅に出るとて忝人などに云佗る也」(十六・オ)千里万里を隔とも只今もろと
もになかむる月(マ)こそかた見なれ あひたかに恋しからむ時ハ月を見ハ我
も見つくし(マ)このことの葉をあひたかに忘しと契りて出つれハその面影や
古郷の月に見やらんと也 月の色に副て我面影ハ古郷に見やらんと也」(十
六・ウ)

27 いはさりき今こんまでのそらのくも

月日へたて、物おもへとハ

君ハいまこんとこそいひて別つるか 月日隔て物おもへとハいはさりき物
を何とてとハさるらんと也 今こんとハやかてまいるへきと云心也 あな
かち今当床にてハなし いはさりきと也

28 めくりあはんかきりハいつとしらねとも」(十七・オ)

月なへたてそほかの浮雲

いつめくりあふへきかきりはら所ハ云をかねともかねてもろともに詠し月
なれハ 若月を見ても此方の事をおもひ出しておもひみす便もやあらん
月な隔そよそのうきくもとなり

29 人住(マ)ぬ不破の関屋の板ひさし」(十七・ウ)

あれにし後ハた、秋のかせ

荒はてたる不破の関屋なれハ風までもさひしく物あハれなり 秋の風ハ何
聞もさひしけれハ荒にし後ハいつもた、秋かせのミなり 契様かれぬれハ
春夏秋冬ミな秋かせと也

30 春日山都の南しかそおもふ」(十八・オ)

北の藤波春にあへとハ

摂政殿ハ藤原氏にて春日の御神の氏子にてましますなり 明神の立給ふよ
り北に住給ふなり さてく北の藤波春にあへハ摂政殿藤原氏にてますな
れハ氏子の代繁昌してさかん(十八・ウ)なれとそおほさるらんといへる
心なり 我家の祈禱之哥也 藤家の鎮守ハ春日明神にてましますと先心得
へきなり 藤家には南の家北の家有 春日山ハ南なれハ北の藤波春にあへ
るとなり 栄よとの心なり 藤家春日 源氏八幡 平家侍兄之嶋なり た
ちはなの(十九・オ)家にハ梅宮

後京極之御弟子

31 いつまでか泪くもらて月ハミし

秋まち得てもあきそ恋しき

色をよそにしられしとふかくつ、むと也」(十一・オ)しかハあれと夕暮になれハつ、しむ心を忘はて、打なけかる、也 契さためて夕をは歎なれハ我のミ恋かなしミて人しれすくらせるよとすて、ハ打なけかる、と也

18 たまの緒よたえなはたえねなからへは^(xで)

しのふることのよハリもそする

命にかへたる恋なれハ若なからへハ」(十一・ウ)しのふる事のあらハる、へし あらハれぬ前にうせはやとなり 絶なハちきり絶ハ也 のちの絶なハ、玉の緒よたえなハと也 しのふる事のあらハれやせんと也

19 いきてよも明日まで人ハつらからし

この夕暮をとハ、とへかし

今をかきりの一せつ也 明日までハ命のあらん事ハ堅かるへし おもひ」

(十二・オ)よらる、ことならハ此夕暮にとへかし一め見んと也

20 それなからむかしにもあらぬ秋風に

いと、なかめをしつのをたまき

秋風ハむかしの秋かせにてありなから我か身ハ老ぬる也 あハれに思ひてしつかをたまきミれハ次第にくりまとへて又はしめよりくりかへすためしあれ共」(十二・ウ)我かとしハくりかへされすと也 秋のそらは昔にてそれなから侍り 我は昔にもあらぬと也 しつかをたまきいと、にしつかをたまきとつ、けり 身の昔にうつりかへれかし

後京極摂政大政大臣 後法性寺入道関白大政大臣之次男 母従

二位秀行女

21 みよし野の山もかすミてしらゆきの」(十三・オ)

ふりにし里に春ハ来にけり

この哥けんちやう躰の哥也 山も里も白雪ふり来れとも 春のすかたハウちかすミて来れハなり ゆきをふるとよせ又よし野に古郷といへる心あるに候也 迷玄^(ママ)三本也

22 あまの戸ををし明方の雲間より

神代の月の影そさやけき」(十三・ウ)

天と地とひらはしまりしときの くも間よりの月影ハ神代今の我、か代までも替らす残なりけなると也 明かたハ暁の色肝ひらくる也 神代の月とハ其はしめを詠侍ると也

23 雲ハミなはらひはてたる秋かせを

松にのこして月を見る哉」(十四・オ)

月をかくせし雲をハ皆秋かせかはらひつくしたれハ月のくまなきに向ひるたる時節 いまた秋かせ松にのこりて りんく^〱と音信ハ猶々心すミのほりて きうかんたえかたきと也 秋かせ松にのこれるハ月くもるへき様そなきそこにふくめる御心も候ハんや 月ハ悉皆はらい」(十四・ウ)つくしぬれハ一りんの清光ハ久遠より今日至まで朗成とおもハる、心也

24 いつもきく物にや人のおもふらん

こぬ夕暮の松かせの声

松を吹風ハさひしけれとも物おもハん人ハた、よのつねにき、なす也 君かこぬ夕暮ハさも物あらハれなるに松かせさへさひしく音信て一しほかんる

にて侍り

式子内親王 後白河院第三皇女

御母ハ二品親王守覚ミタケ前斎※〔七

・オ〕院

11 山ふかミ春ともしらぬ松の戸に

たえ／＼かゝるゆきのたま水

深山迷谷（ママ）に引籠てハ年月うつり行をしられぬに軒はよりゆきのたま水すこしつゝ落を見てきてハ春に成けるよと（セ・ウ）おもひたる斗に 松の戸に述懷卑下の心あり 絶（ママ）うかるゝ雪（この誤か）のたま水と侍ハ春ともしらぬ山なれとも大心イ本に私なきと王道を詠侍と也

12 なかめつるけふハ昔に成ぬ共

軒はの梅ハわれを忘な

此梅の花にハあハぬ事（ママ）もけふ斗かハ（ハ・オ）又あハん事ハ命もおほえかた

したとへ我ハうせてけふハ昔にへたゝりつ共とし来て有ぬれハ梅殿我を

忘給ふなとしうしんの移けり 一本の哥云人丸 ねかハくハ桜か本にうつ

もれて花ともかゝる土とならハや このつるハ過去ならすいと心得可

のきはの梅よりほかハたれか我を（ハ・ウ）おもひ出へきと也13 詠※佗ぬ秋よりほかの宿もかな

野にも山にも月や住らん

月をなかわれハうき事ともうかひ出せんかたなけれハ 中／＼月をなかも
 しとおもへ共秋よりほかのやともなけれハ月をなかもぬ事をのかれんとお
 もへとも（九・オ）いつくも天か下なれハ野にも山にも月や住らんといいひか

なしむ也 一本の哥に大江千里（米）〇月見れハ千／＼に物こそかなしけれ我か身ひとつの秋にあらねと 一〇詠（米）れハ物おもふことのなくさむハ月はうき

世のほかよりや行 秋天の月にたいして愁情のかたけれハ佗ぬと也 秋よ

り（九・ウ）ほかの宿もかなとねかへり

14 桐の葉もふミ分かたく成にけり

かならず人を待となけれと

桐の葉のはらりと散る時節 庭に立出てかならず人を待となけれと散りた

ると也 様々の説有 しかハあれとも馴様の上にも侍るらんかならずとい

へり 字に堪あり（十・オ）15 きままつとねやへもいらぬ横（×ん）の戸に

いたくなふけそ山のはの月

夕闇をよすかして きみをまつ時節 月殿山のはをいたくなふけのほり給

ひそと也

16 夢にても見ゆらん物をなけきつゝ

うちぬるよゐの袖のけしきハ

とハれぬをうらみてせんかたなく歎つゝ（十・ウ）打ぬる宵の袖のけしきハ

やハか あなたの夢に見えすあるへきかと心つよくも問こんと也 袖のけ

しきとハ涙（ママ）の道なり17 忘てハうちなけ（か）るゝ夕かな

我のミしりて過る月日を

せんかたなきおもひのミにて過る月日の数をのミしりながら この思ひの

4 我か恋ハ横のした葉にもる時雨

ぬるとも袖の色に出めや

しのふ恋と云題の哥也 横の下葉〔二・ウ〕 まて人しれす時雨もり入たれともやハリ色にハ出へき かくのことく我か袖も上より下までぬれとをりたれともきりとも思ひのなミたとハかハるへきと也

5 袖の露もあらぬ色にそきえかへる

うつれハかハるなけきをしまに^せ

なけきせしまにいかハかりの日数や〔三・オ〕うつりけんはや袖の露も唐紅にかハりはてたと あらぬ色と云ハ紅の涙也 前恋かなしミて後うつろふをなけきてよめるとかや 忘恋と云題なり 小野小町か 白玉と見えし泪も年ふれハからくれなゐにうつろひにけり〇花の色ハうつりにけり^{（末）}いたつらに我か身世にふるなけき〔三・ウ〕せしまに

6 おほそらに契るおもひの年もへぬ

月日もうけよ行末のそら

明暮思ひのミして天にあをき月日を送てけるに はや身もよハリ露の命もおほえかたくて心ほそきま、年来大そらの月日と 契おきぬれハ行末のそらをハ忘給ハす〔四・オ〕うけ給へとハしうしん也 物おもふ人ハさう天を見てそらを詠侍る さて行末の契もしられされは也

7 詠はや神路の山に雲きえて

夕のそらに出ん月影

天照大神をあかめ奉によめる 所、月ハあれとも神路山の月影を詠はやと

ハ彼御山ハ 伊勢大神宮〔四・ウ〕の上の山に日月ハ御本人の心も正直にならはやとなる躰也 雲消て月影さゆるなることく

8 おもひ出る折たく柴の夕煙

むせふもうれし忘形見に

忘かたき形見の事也 忝人などを夕の煙と成て常住になく時節 柴をおりたく夕の煙を見て其〔五・オ〕面影を思ひ出なつかしくおもふ心也 哀傷云也

9 ミつかきや我世のはしめ契置し

そのことの葉を神^やうけけん

天と地とひらははしまりしときを君といへり 神代の時 神のためには君か 我か世のはしめに契置給ひて君の内にかくれ給也〔五・ウ〕そのことの葉を神やうけけん^{（末）}とハ如此道理を神ハうけかひけりとなり ミつかきの事也 神道にハミつかきの字をよめり 心意誠の三心也 一には仏と心得神と心得迷異愚人と心得て意の字をミつかきとよめり 母のたいなひを出てまなこを見〔六・オ〕ひらきたり 剣ハしやうわうしやくひやくこくにわたる心にてたんできを見つけて正直の神共いへり 如此言に懇したらん人ハなるへきなり

10 無人のかたみの雲や時雨らん

夕の雨に色ハ見えねと〔六・ウ〕

おもふ人を夕の煙となしての後其煙に似たる夕の雲を見て涙ハ雨のことくにはらりとこほれぬるをかたみの雲のしくるかとおやまたれけると也 た

翻刻

〔白讀歌抄〕

凡例

翻刻にあたって次のことに留意した。

- 1 仮名遣いは原本通り、漢字は特別なものを除いては通行字体に改めた。
- 2 歌は原本の形態通り二行書きとしたが、形式の調っていない75 88 94 110番については統一をはかった。なお、歌に通し番号をつけた。
- 3 宛字、誤字、重複などは原文のままとしたが、特に不審な点については(ママ)(○○カ)など注を附したところもある。
- 4 補入は「○」印、見せ消ちは左に「と」を付して示した。又、重書は該当文字の右に(×い)のように重書の下の文字を記して示した。
- 5 破損箇所は□で示し、部分的に残った字画で文字の推定できるものは○の形で示した。
- 6 作者名は、原文では前の注文に続いて記され、判読しにくい箇所があるため、原文の形式のままではなく統一をはかったところがある。
- 7 注文の改行は紙幅の都合上原文通りではない。
- 8 注文中の本歌に付した○印は原文のままとしたが、鉤点は省略した。
- 9 丁替りは「(一・オ)」(二・ウ)のように示した。

松子山居

後鳥羽院

支子文庫

1 桜さく遠山鳥のしたり尾の

なか／＼し日もあかぬ色かな

永日なれ共ミしかくおもひてあかぬ色なり 遠山鳥のしたり尾とは〔な〕か
くしといはぬため也 (ママ) これをはんひ□□□□□をり 山鳥の尾のしたり

尾とハ(一・オ)□□てなかきを也 本哥に人丸 〔あ〕しきの山鳥の尾のし

たり尾のなか／＼し夜もひとりかもねん

2 露ハ袖に物おもふ比ハさそなおく

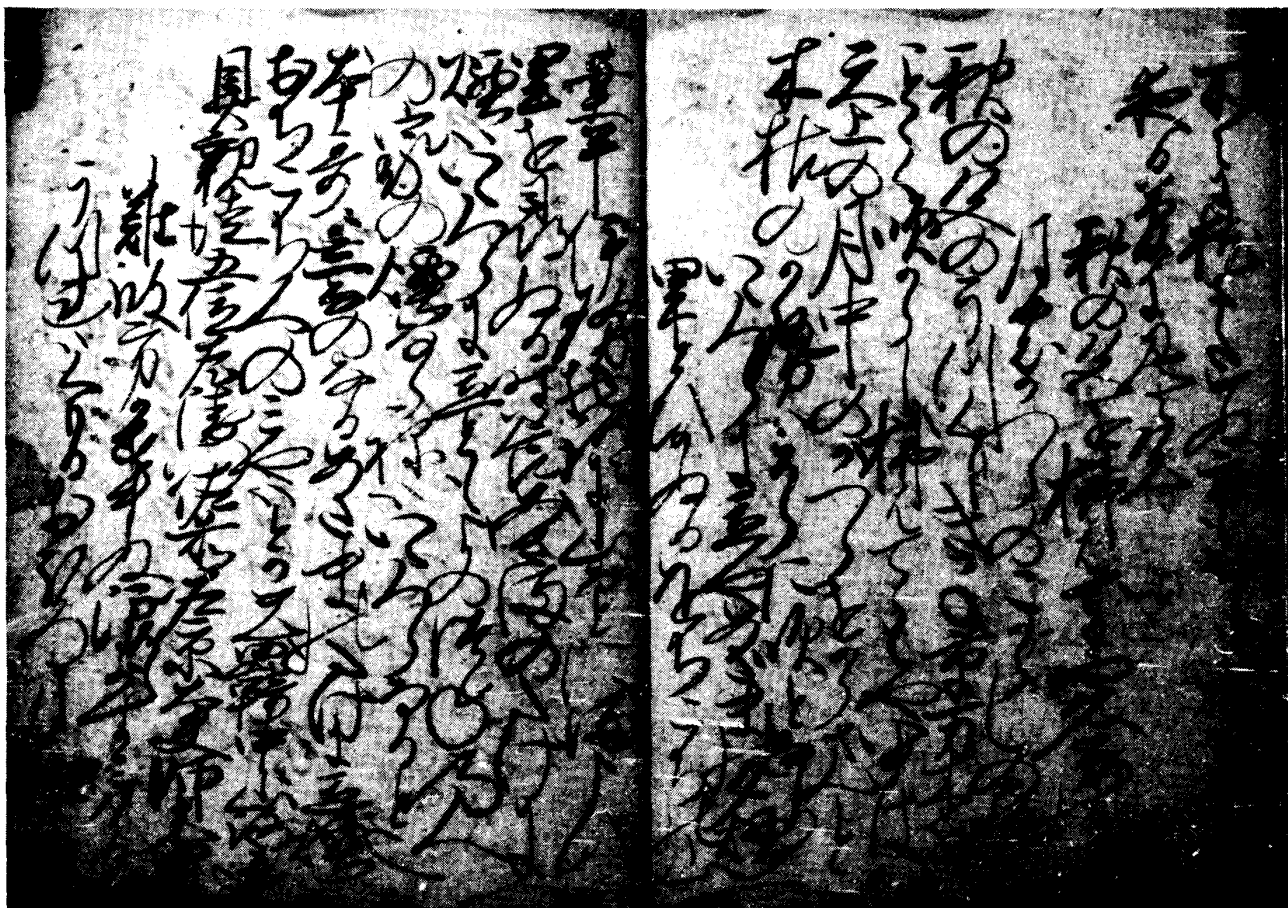
かならず秋のならひならねと

秋おく露ハた、よのつねの露也 袖におく露ハ物おもふときの露也「(一・ウ)」
物おもふハ秋にかきらす恋にかきらす 物おもふ袖にさそなをくといふ
心ハ物おもふ袖にかうそおきける○といへる躰也 一躰にハ秋のならひな
らねと露ハ袖にをくと也

3 見るまゝに山風あらくしくるめり

都もいまや夜さむなるらん

これハ光陰の躰也 御熊野御「(二・オ)」参詣御とき山々のけひき日にそへか
ハリ行を御覧してはや都も夜さむに成てそあるらんとおほしめしてあそハ
しけると也



(72・オ)

(71・ウ)



(88・オ)

(87・ウ)

もに出入りの多い通光の歌は叡山文庫本と等しく「うす氷きよき鏡と見し物を桜にくもる花の下水」「立田山夜半に嵐の松吹は雲こそうときみねの月かけ」「月さゆる磯におりる浜千鳥あとふみつけつ秋の形見に」「かせ寒きあら田の面に立嶋のはおとさひしき秋の夕暮」「たつねても袖にかくへき方そなきふかきよもきの露のかことを」を有している。なお歌順等で多少とも問題を含む点をあげれば、通具の「木葉ちる時雨やまかふ我袖にもろき涙の色と見るまで」に代って慈田の歌「木葉散る宿にかも敷袖の色をあり共しらて行嵐哉」が再び記されていること、但し注内容は通具の歌のそれであるが。そしてこの歌と続く「せき返し」「今こんと」の計三首が釈阿の歌の中に混入していること。秀能の歌では、「下紅葉うつろひゆけは玉ほこのみちの山かせ寒く吹らし」が自讃歌として掲出されず、流布本宗祇注等に同歌の本歌として引かれた「玉ほこの道の山かせ寒くして形見なからもきなむとそおもふ」が掲出され、「下紅葉」を逆に「玉ほこの」の本歌として注文の中に引いた形となっていること、などがあげられる。

石川常彦氏は「自讃歌宗祇注の周辺」(「山辺道」昭和五十四年六月号)の御論考に於て、久保田淳氏蔵本注と鍋島本・叡山文庫本及び本書との注文内容における具体的な相承関係のあることを指摘され、本書の注も二種以上の注の合成であろうこと、また歌順等形態上からも叡山本に近い点などにふれておられる。鍋島本や叡山本の注文との相承関係等については後考にまつ次第である。

注「故田村專一郎先生旧蔵「支子文庫」報告(語文研究四十三号、昭和五十二年六月)」

による。

末筆ながら蜷川親当筆『自讃歌』(「鹿児島県立短期大学紀要」第三〇号に翻刻)にひき続き貴重な資料である本書の翻刻をお許し下さった九州大学図書館に対して、心から御礼申し上げます。



支子文庫本『自讃歌抄』翻刻

福井迪子

ここに翻刻するのは、九州大学図書館蔵支子文庫本「自讃歌抄」(仮題)、整理番号(九一一―三)である。

本書は、縦21.2cm×横15.9cm、一冊。永正九年写。料紙は楮。表紙は失われており大和綴。内題なし。第一丁左肩部分が破損して、少し読めない文字がある。墨付八七丁。歌は原則として注文より二字下げ二行書であるが、原則通りでないもの数首あり。前半部は一面七行―九行書、後半部は一面十行―十二行書。歌数一六九首。但し注文は一七〇首分あり。朱の鈎点、印などを付す。見せ消ち・訂正・重書・同筆による墨の補入あり。奥書に「右之歌書事任本書之／色々御審心多かるへく候／少も筆者無裁度候／(署名あり、墨で消す)／永正九年霜月十八日書之」とあり、書写者の識語とみられるが、署名が墨でぬりつぶされているため書写者名は判読できない。

巻末の自讃歌最後の注文(八十六・ウ)に続いて(八十七・オ)(同・ウ)に発句の附載十二句、政資・友祐の作者名が見える。そのあとの(八十八

・オ)に前記の奥書があり、さらにその裏に「佐州にての連歌」として、短連歌一首と短歌三首が記され、「三条西殿」・「宗綱」の名がみえる。三条西殿は実隆、宗綱は松木宗綱であろうか。^注連歌短歌の部分は別筆かと思われるが、本書の書写者及び所持者などの圏内を考える上でも注目される。巻頭部に「松子山居」「支子文庫」、識語の後に「松下」「謡山麓舎」印を押す。いずれも故田村専一郎先生旧蔵印である。

後鳥羽院以下の作者順は、式子内親王、摂政大政大臣、慈円、通光、通具、俊成、俊成女、宮内卿、有家、定家、家隆、雅経、具親、寂蓮、秀能、西行の順で、支子文庫本『自讃歌』(蜷川親当筆九二シ上)、叡山文庫本『自讃歌注』、鍋島文庫『自讃歌注』の作者配列と等しい。前述のごとく本書の歌数は一六九首、たゞし歌の注文は一七〇首分を有する。これは俊成女の「おしむとも涙に月は心からなれぬる袖の秋をうらみて」の注文が、その前歌の注文に続いて記され、歌を欠いているためである。また諸本と